

第12期東京都生涯学習審議会 第6回全体会

次 第

日時：令和4年6月29日（水曜日）

午後6時から午後8時まで

会場：都庁第二本庁舎31階特別会議室22

1 開会

2 議事

「これからの地域コミュニティづくりにおける都立学校の在り方」
について

(1) 澤岡委員からの報告

(2) 海老原委員からの報告

3 今後の予定

4 閉会

【配布資料】

資料 第12期東京都生涯学習審議会第6回全体会 審議資料

第12期東京都生涯学習審議会委員

(任期：令和4年1月13日から令和6年1月12日まで)

氏名	所属
エビハラ ショウコ 海老原 周子	一般社団法人kuriya 代表理事
サイイ ヒロミ 笹井 宏益	玉川大学 特任教授
サワオカ シノ 澤岡 詩野	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団主任研究員
シンダ マナミ 志々田 まなみ	国立教育政策研究所生涯学習政策研究部 総括研究官
タケダ カスヒロ 竹田 和広	一般社団法人ウィルドア 共同代表理事
ノグチ アキナ 野口 晃菜	一般社団法人UNIVA 理事
ヒロシ タクジ 広石 拓司	株式会社エンパブリック 代表取締役
フクモト ミチヨ 福本 みちよ	東京学芸大学教職大学院 教授
マツヤマ アキ 松山 亜紀	株式会社セールスフォース・ジャパン 社会貢献部門 ディレクター
ヨコタ ミホ 横田 美保	特定NPO法人持続可能な開発のための教育推進会議(ESD-J) 事務局長

(令和4年4月1日更新)

第12期東京都生涯学習審議会

第6回全体会 審議資料

令和4年6月29日

第4回全体会 次第

1 開会

2 議事

各委員からの「検討枠組み」を受けた提案

(1) 澤岡 詩野 委員

(2) 海老原 周子 委員

3 今後の予定

澤岡委員からの報告

ご近所ラボ@都立高校
～多世代が知りあい，地域を学ぶ～

地域に「コミュニティ」が
存在する意味ってなんだろう？
なぜ、つながらなければならないの？
古いも若きもイメージできない...

ご近所ラボ@都立高校 ～多世代が知りあい，地域を学ぶ～

(公財) ダイヤ高齢社会研究財団・主任研究員

澤岡詩野

sawaoka@dia.or.jp

「自分らしく」「豊かに」 歳を重ねるのは 思った以上に大変



10代は10代なりに、100歳は100歳なりに
大変なわけで...

でも歳を重ねる程に体力と気力が衰える
つながりも減っていく
でも経験や知識は豊富

身体や心の健康...
お金...
自分では
思い通りにならない
ことばかり

共通の願いは
「健康長寿でいたい」

人生100年時代
生涯現役
なんて言われても...

生き方を見つけられず、
さまようシニア達...
終活関連の本や講座が
大流行
(勘違い終活が横行)

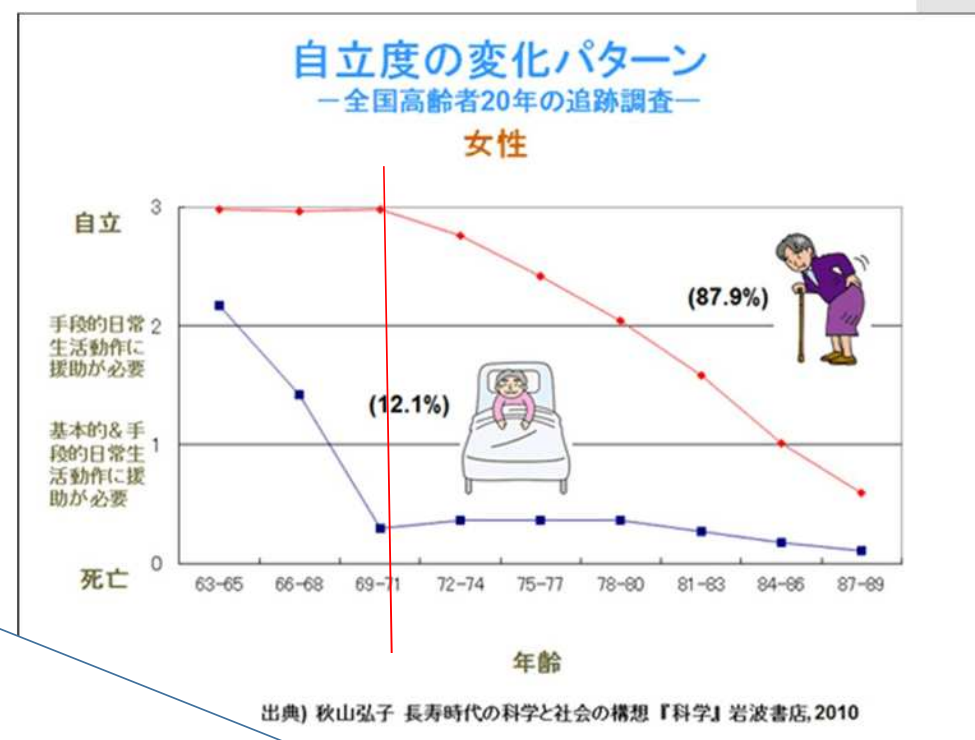
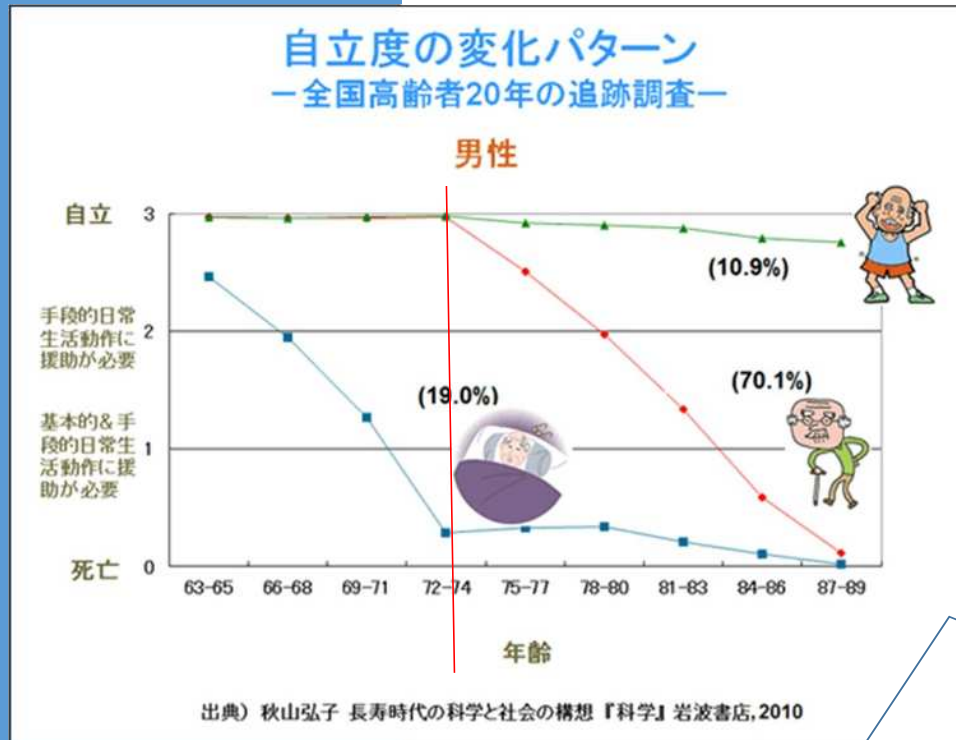
おまけに多様...
でも豊かさの土台は
共通している

健康長寿でいるためには？
知識や経験を活かした
「生きがい」を持ち続けること！

介護予防， 認知症予防にもなる

でも， みながそうしたいわけでも
そうできるわけでもない...

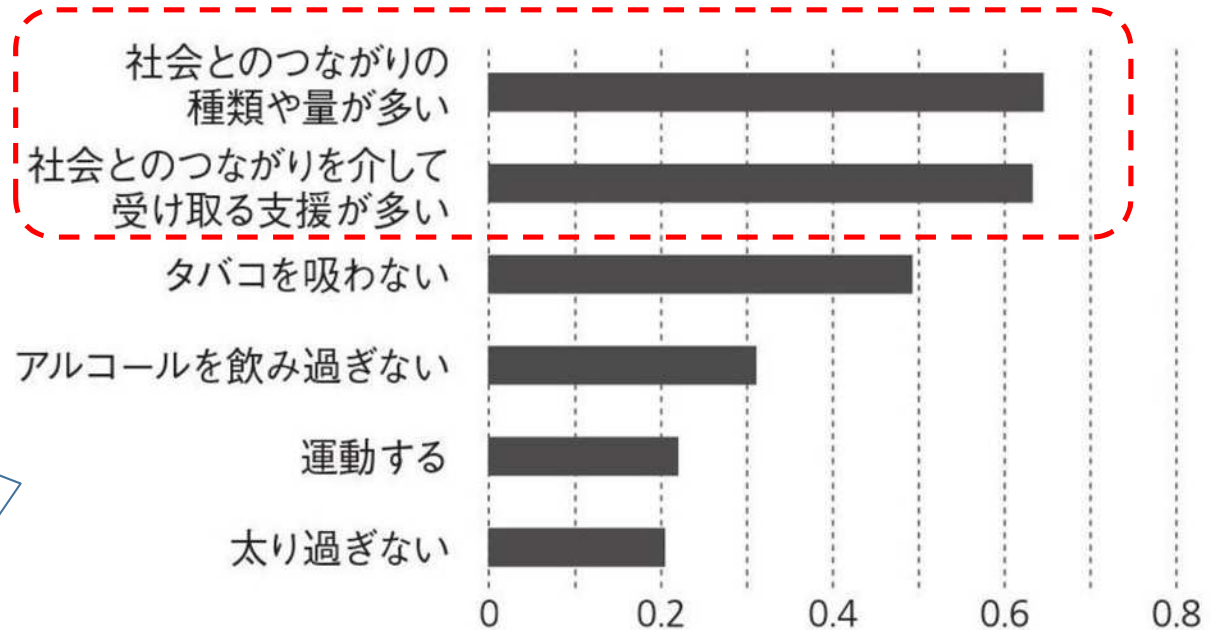
地域ではなく「近場」



- 男性の7割，女性の9割が70歳頃から「虚弱化（フレイル）」
- 外出が徒歩・自転車圏，自宅から[近場]に
- ➡ 歳を重ねるだけではなく，子育て，病気やケガ，家族の介護など，外出困難な状況になった時に意味を増すのが「近場」

「ゆるやか」な距離感

図1 ● ライフスタイル別での長寿への影響の比較



数字は、死亡率の低さに与える影響の大きさを表す。
ゼロの場合、影響がないことを意味する。

出典: Holt-Lunstad J, Smith TB, Layton JB. Social relationships and mortality risk: A meta-analytic review. PLoS Medicine 2010; 7(7): e1000316. (論文より筆者が図を作成)

オトナから子どもまで、
「つながりがない」事は、
身体的にも心理的にも
ネガティブな影響しかない

➡ 一方で、つながりが
「ストレス源」になる
というデータも

➡ 大事なものは距離感
「つながりの質」

少しの「プロダクティブ」

-ワカモノにはワカモノの
高齢者には高齢者の
得意なことがある

-「できること」を
「自分が楽しく」
誰かに「わける」

➡人によって異なる
多様なタネマキが必要

『プロダクティブ・エイジング』

-就労，ボランティアや地域活動，家事など，**支払の有無は関係ない**

-自分以外の誰かに，時間，楽しみ，情報，食物などを
わけること

➡ウォーキングついでのごみ拾い，活動の場に誘う，
誰かを褒める・笑わせる

-自己完結な活動のみを行う人よりも，死亡や心身の
病気になるリスクが低く，幸福度が高い

-住んでいる地域も活性化で皆がハッピー

もう一つの大事なものは 「ジェネラティビティ」

「ジェネラティビティ」
という言葉で改めて
注目されている

➡とはいえ、最初から
それを意図する必要
はない

➡80代が60代に
生き方を見せるのも
そう

➡多様な在り方がある

■多世代での交流が生み出すのは？

例えば「NPO法人かながわ子ども教室」

-目標は知識や経験を活かして「未来のノーベル賞を育てる」
-大手企業OB会の有志が飲み会で今の科学教育を嘆いたのが
はじまりキッカケ

➡子ども学ぶ機会を、シニアは生きがいを得られ、学校も
みんながハッピー

こういう場に出るのは大変、
伝える経験がないという人も...

➡バスでの挨拶といった姿を
見せるのも実は世代間交流

➡循環でコミュニティが変わる！



空気を抜くところよく探して、この会話が楽しい

コミュニティに求められているのは 「多様性」



これまでの考え方は通用しない
多様なタネマキが必要
先ず目指すのは
「全ての人になじんだ誰かを
地域にもてること」

「つながりを拒否する人
「支援を拒否する人」
「孤立した可哀そうな人」

➡決めつけていませんか？
近所と距離感が保てないのは苦手
知らない人から見守られるって
監視されているみたい
支えられる側に押しやられたくない

■コロナ禍を通じて、
- 「なじんだ誰か」の
存在が力になることを
再確認

(気にしてくれる誰かが
くれる安心感、知らない
人に悩みを吐けない)

- つながりをもたない人
にタネをまく必要性
も再確認

➡ どうすれば良いの？
既存の働きかけでは
効果が薄いし...

「出てこない人」に
なじんだ誰かのタネをまくには？

すでにある場，仕組みで 「新たな居場所」をつくる

「ご近所ラボ」プロジェクト（神奈川県庁との共同事業）

- 場所：地域に関わりの少ない人の家以外の生活の中
お買い物に付き合い暇そうにウロウロする人
本を片手に駅前のカフェに毎日通ってくる人

➡カフェ，コンビニ，ホームセンター，ジム，図書館など

■運営：【場所と活動の場の提供】

➡地元の商業施設など

リピーターの獲得，地域の活性化で購買も活発に？

【お墨付きや広報手段の提供】

➡役所などの公的機関

閉じこもりや孤独死を抑止でき，財政負担も軽減？

【講座の企画・運営や長期的なサポート】

➡地元の市民活動センターなどの中間支援組織

リーチできなかった人への働きかけ，担い手候補？

■ 「日曜大工」

ホームセンター＋
DIY大好きなおじさま

➡生活支援ボラに興味を
持ってもらえたら...

■ 「プログラミング」

家電量販店＋
かつての電子工作少年

➡小学校サポーターに
関心を示してもらえたら

■ 「スマホ」

携帯ショップ＋
使ってみたいシニア
地域の情報に関心を
示してもらえたら

「ご近所ラボ」プロジェクト ：目指すモデル



■人生の変化のなかで、
その時々「生き方」を
見出せる人は少ない
「レジリエンス」を發揮
するには『学び』と
『なじんだ誰か』が必要

-意識高い系ではない人に
こそタネをまく必要性が
ある！

➡どうすれば良いの？
既存の働きかけでは
効果が薄いし...

都立高校で「ご近所ラボ」を
やってみたら？

シニア層にも必要な 「サービスラーニング」の機会

■多くは大学生が対象
だけれど...

「自信の獲得」

「学習への動機づけ」

「生活やアカデミック
スキルの向上」

「市民性の獲得」

➡これって中高年に
とっても大事？
人生100年時代の
生き方を考える、
異なる世代や人を
理解するなど

■国際基督教大学が三鷹市で行うサービスラーニング
市内の住民活動がテーマをプレゼンし、学生さんは興味
のある処に参加

-井の頭一丁目町会が学生さんにした3つの提案

スマホ個別対応相談会

小学生の放課後の居場所

学生さんのやりたいことを町会で応援

➡もっと町会組織について知りたくなった

思いもかけないアイデアがでてきた

学生さんとやるってこんなに楽しい

18時間は短い、町会としてこの動きを継続していきたい

多世代が地域を学ぶサービスラーニング 「ご近所ラボ@都立高校」

■ 都立高校を起点にした徒歩圏・自転車圏エリアに限定したサービスラーニング

- 高校生や大学生，職住分離の就業者，定年退職者，子育てがひと段落した主婦など

- 総論では「大切だね」といいつつ，

- 地域って，コミュニティってなんだろう？

- 地域やコミュニティで多様なつながりが必要な意味ってなんだろう？

- 地縁組織や住民活動の必要な理由ってなんだろう？

➡ 多くは，そこに「自分ゴト」の答えを見出せない
そもそも接点のない外国籍の人や障がいをもつ人，
異なる世代，のイメージすらない

「ご近所ラボ@都立高校」というタネ

■地元「都立高校」を媒介にすれば地域に関われる人もいる…

■自分と異なる存在をイメージできれば、決めつけや偏見が少なくなるかもしれない…

■地域と接点の少ない親世代にも波及効果があったらよいな…

■徒歩圏・自転車圏の中高年にとって…

-ほどよい距離感で生活する地域について学べる

➡地域や学生さんとの関わりから生き方を再構築

-被災時、病気や事故や加齢に伴い思うように動くことが難しくなる前から、気軽に地域に関われる

➡普段からの接点があればSOSも出しやすい

-ワカモノや誰かになにかをシェアできる

➡この場にすれば、多様なプロダクティブがある

■都立高校の学生さんにとって…

-いつもの学校でサービスラーニングの機会が得られる

-自分の住んでいる地域コミュニティをイメージできる

海老原委員からの報告

「都立学校(高校)と連携・協働した青少年の育成」
— 都立学校施設等の効果的活用の在り方 —

「都立学校(高校)と連携・協働した青少年の育成 —都立学校施設等の効果的活用の在り方」(仮題)

2022年6月29日



kuriya

一般社団法人kuriya 代表 海老原周子

<http://kuriya.co> contact@kuriya.co

はじめに

本日の流れ

- ①自己紹介・活動紹介
- ②現状と課題(外国ルーツの高校生・若者について)
- ③提案(高校と連携した青少年育成に向けた視点・設計)

はじめに

本日の流れ

①自己紹介・活動紹介

②現状と課題(外国ルーツの高校生・若者について)

③提案(高校と連携した青少年育成に向けた視点・設計)

団体紹介

たくさんの可能性を持つ外国ルーツの若者が輝ける社会へ

対 象：16歳～26歳の外国籍等の若者

設 立：2009年より活動開始、2016年に法人化

活動内容：①多文化居場所作り ②多文化キャリア教育 ③政策提言

活動実績

参 加 者：約300名（中国、フィリピン、ネパール、ミャンマー、タイ、インドネシア、ブラジル、日本など）

実施地域：東京を中心に、神戸、茨城、愛知。定時制高校、ブラジル人学校、ネパール人学校で実施

代表略歴

慶應義塾大学卒業後、(独)国際交流基金・国連(IOM国際移住機関)で勤務。2009年に外国籍の中高生と地域とをつなぐ多文化理解ワークショップを立ち上げた事をきっかけとして、2016年に一般社団法人kuriyaを設立。外国籍等の高校生のキャリア育成に着手し、定時制高校での居場所づくりを通して、中退防止やキャリア支援に取り組んできた。また、多文化理解教育として、映像や写真を通じた外国籍等の子どもや高校生の表現活動も行なう。東京を中心に、これまで100回のワークショップを実施。

1. Art Workshop 学校外での居場所づくり

- ・ 映像・写真・ダンス・音楽などを通じた多文化交流ワークショップ
- ・ 主に東京を中心に、茨城のブラジル人学校やネパール人学校でも実施
- ・ 児童館や地域団体との連携



2. After School 学校内での居場所づくり

- ・ 定時制高校にて週1回～3回の放課後部活動として実施
- ・ 留学生、大学生との多文化交流
- ・ 高校・大学・NPOによる三者連携



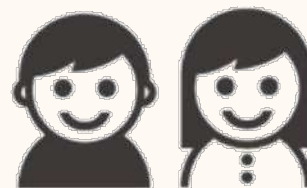
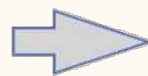
3. 政策提言

- ・ 高校中退や進路の調査を提案 → 高校中退率や非正規雇用の高さが明らかに
- ・ 高校生のための包括支援体制整備を提案 → 補助事業の一環として実施
- ・ 在留資格「家族滞在」の資格切替の要件緩和を提案 → 一定要件のもと、切替可能に

活動紹介



子どもの変化



「友達ができた」・「ここにいると素の自分でいられる」

x

活動紹介

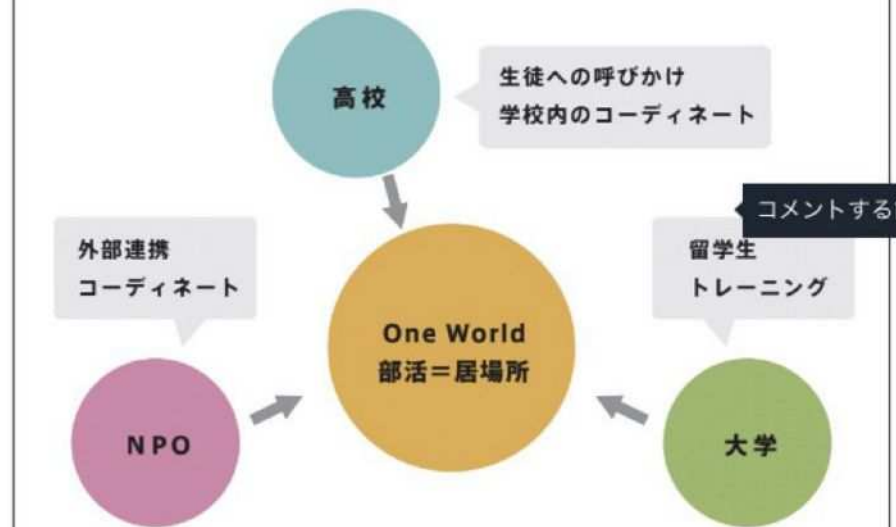
- ・ 外国ルーツの高校生が多く在籍する定時制高校で放課後部活動として居場所づくりを行い中退予防につなげる。

多言語交流部 (One World) について



東京都立一橋高校定時制の部活動
多言語交流部が正式名称だが、
生徒たちの要望で、「ワンワールド」と呼んでいます。

三者連携による居場所づくり



X

外国籍等高校生・若者に対する取り組み

2018年

課題

実現した取り組み

インパクト

課題の
可視化

具体的な
対応

視点の
変化

①中退の壁

→①実態調査の実施

→ ①中退率7倍・進路未決定率9倍

②進路の壁

→②補助事業の実施

→ ②11自治体にて実施

③在留資格の壁

→③要件緩和

→ ③就労への道が切り開かれる

④情報の壁

→④多言語発信

→ ④外国籍住民への安心感

⑤孤立・孤独の壁

→⑤外国人も対象に

→ ⑤マイノリティへの観点

2021年

はじめに

本日の流れ

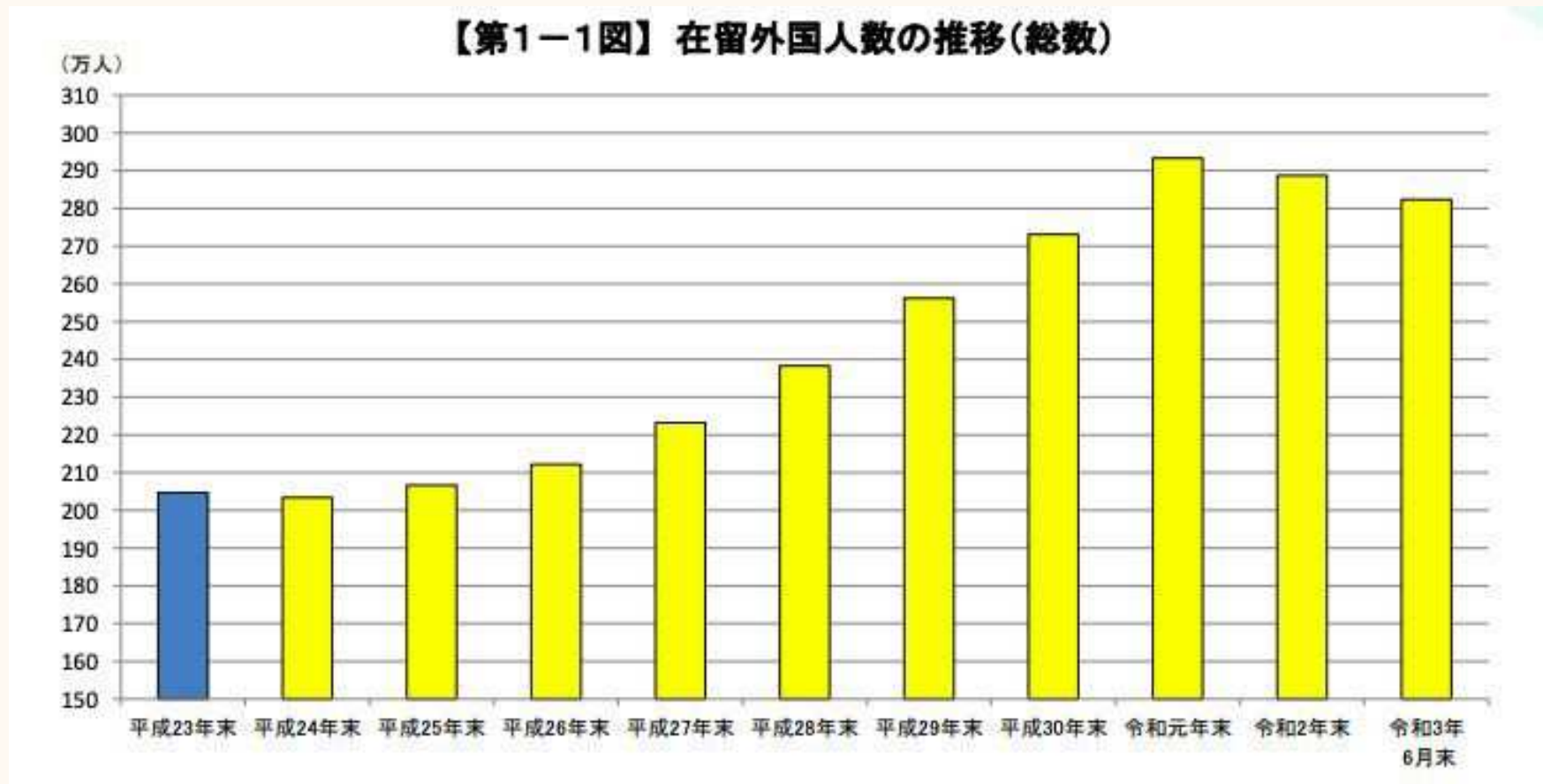
①自己紹介・活動紹介

②現状と課題(外国ルーツの高校生・若者について)

③提案(高校と連携した青少年育成に向けた視点・設計)

現状と課題

●日本に在住する外国人人口は、約2%

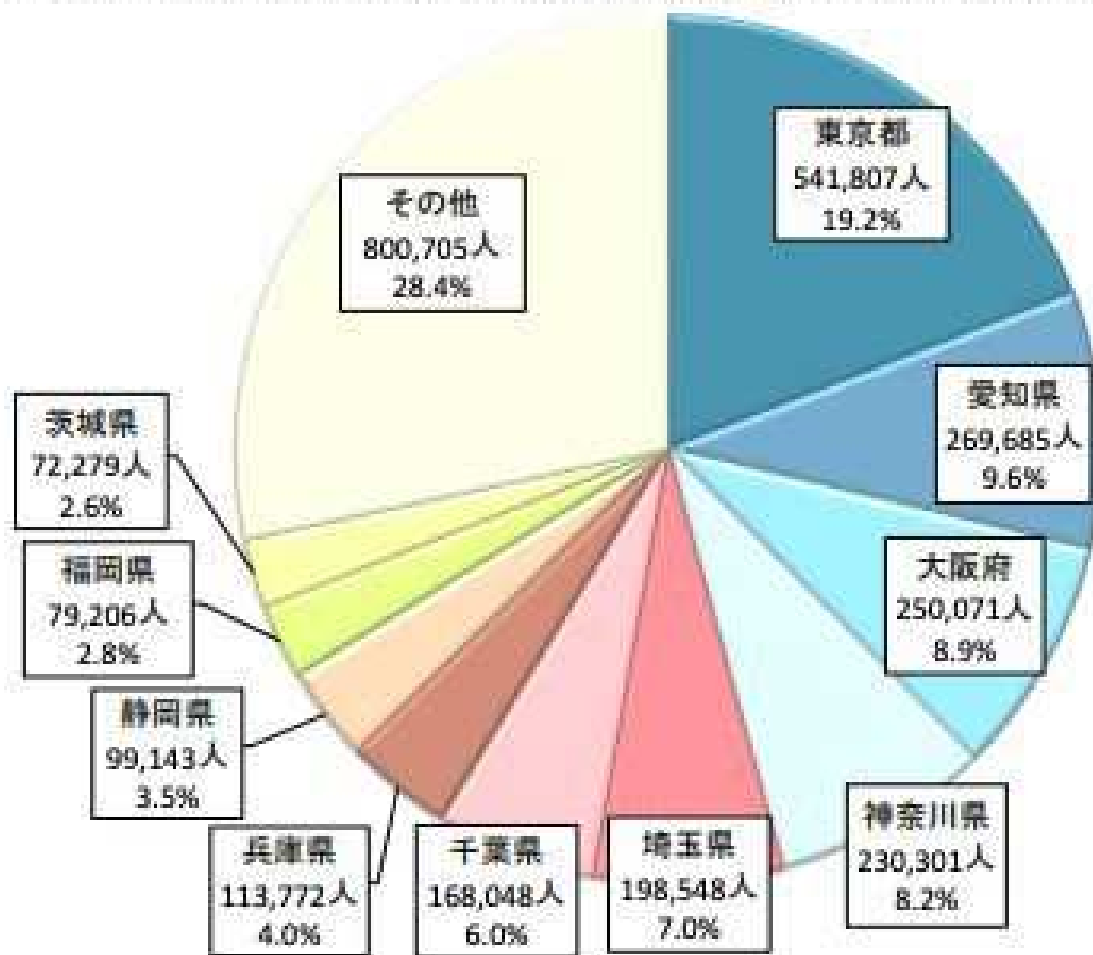


<https://www.moj.go.jp/isa/content/001356650.pdf>

現状と課題

●東京に最も多く在住する約19%

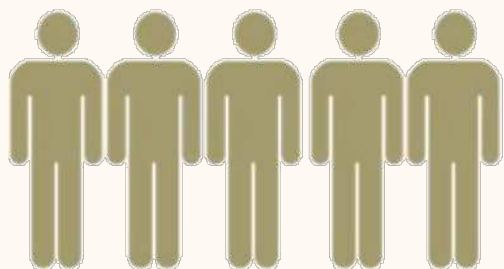
【第4図】 在留外国人の構成比(都道府県別, 令和3年6月末)



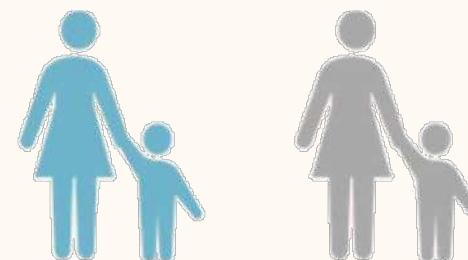
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001356650.pdf>

現状と課題

- 家族と共に暮らすために来日した外国ルーツの子ども・若者
- 日本生まれも増加している。



留学生、技能実習生、会社員など
学ぶため、働くために来日する外国人

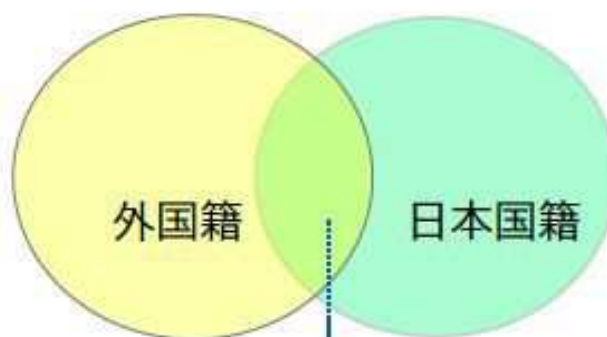
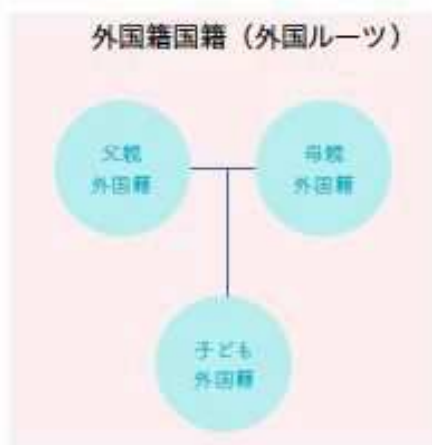


家族と暮らすために来日した
外国ルーツの子ども・若者

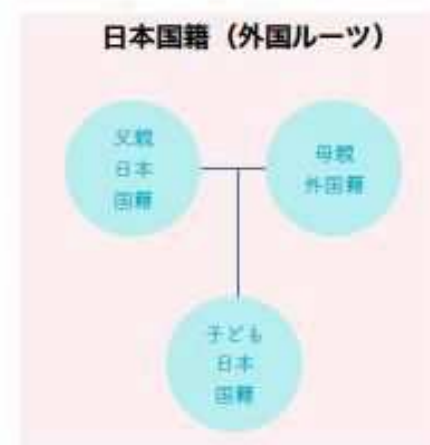
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001356650.pdf>

外国ルーツの子どもとは？

- 「外国ルーツ」・・・両親のどちらかが外国籍



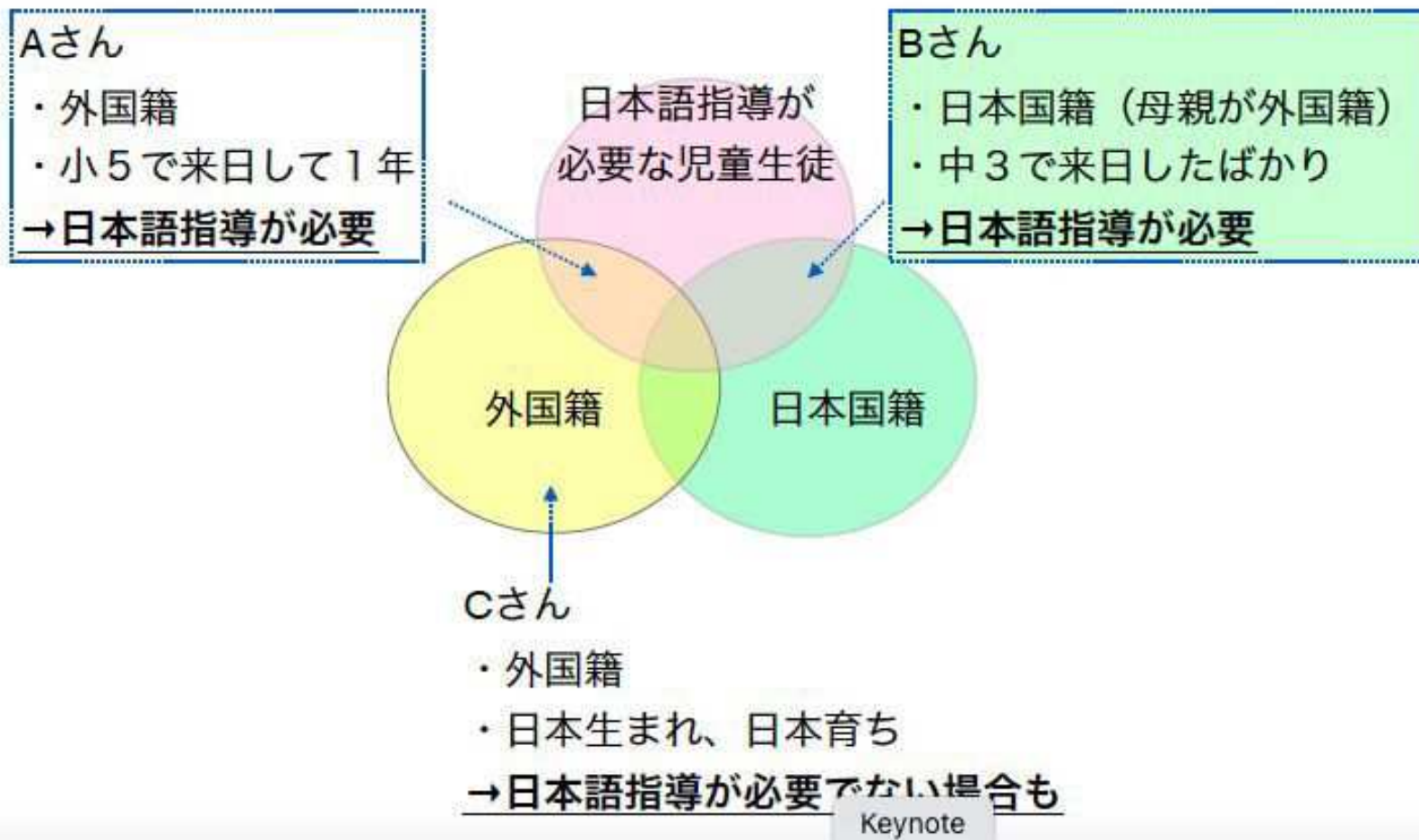
例：外国籍と日本国籍と
両方ある場合も



- 例：
- ・日本国籍で両親のどちらかが外国籍
 - ・日本国籍に帰化した

※外国籍等児童生徒、外国につながりを持つ、海外ルーツダブル、ハーフ、ミックスなど様々な呼び方

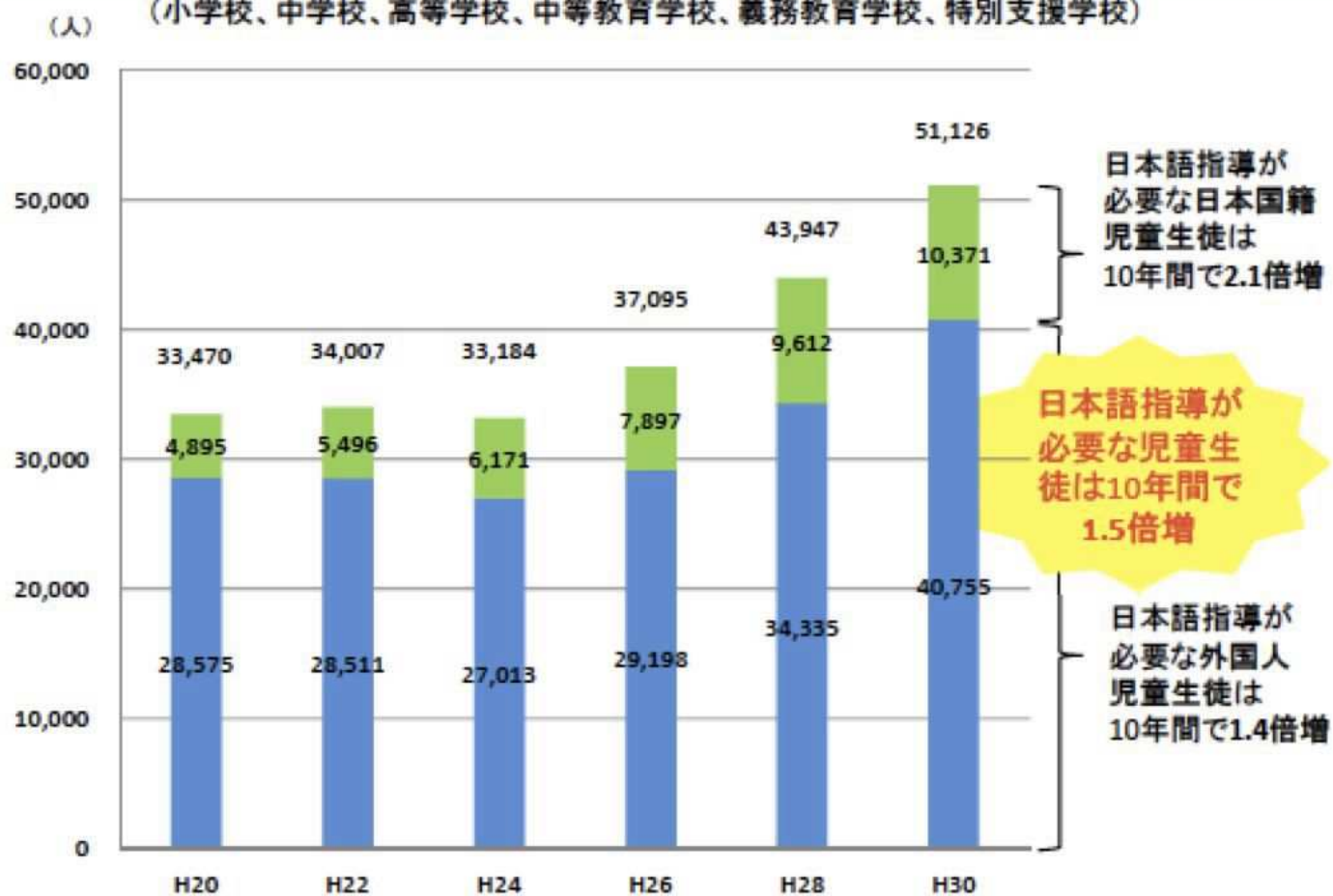
●日本語指導が必要な外国籍等児童生徒とは？



Keynote

公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数の推移①

(小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、義務教育学校、特別支援学校)



(出典)文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成30年度)」³



1 外国ルーツの高校生の高い中退率、低い進学率

2 外国ルーツの子どもが適切なサポートを受けられない

日本語教育が必要な高校生と公立高校生の中退率と進路状況

	日本語教育が必要な高校生	公立高校生	日本語教育が必要な高校生は公立高校生と比べて
中退率	9.61%	1.27%	▶ 7倍以上の割合で中退
進学率	42.19%	71.24%	▶ 進学率は約6割
非正規就職率	40.00%	4.62%	▶ 約9倍の確率で非正規就職
進学も就職もしていない生徒の率	18.18%	6.50%	▶ 約3倍の確率で進学も就職もしていない

出典 | 2018年9月30日 朝日新聞より

これまで出会ってきた子ども・若者が必ず発する言葉は？

「・・・・・・・・」



子ども・若者

「友達がいない」

「相談する相手がいない」



子ども・若者

- ・ これまで育ったコミュニティから切り離されて来日。
- ・ 親にも頼れない状態

日本社会との関係性・・・社会関係資本の少なさ

「言葉の壁」は氷山の一角

「日本語が出来ない」



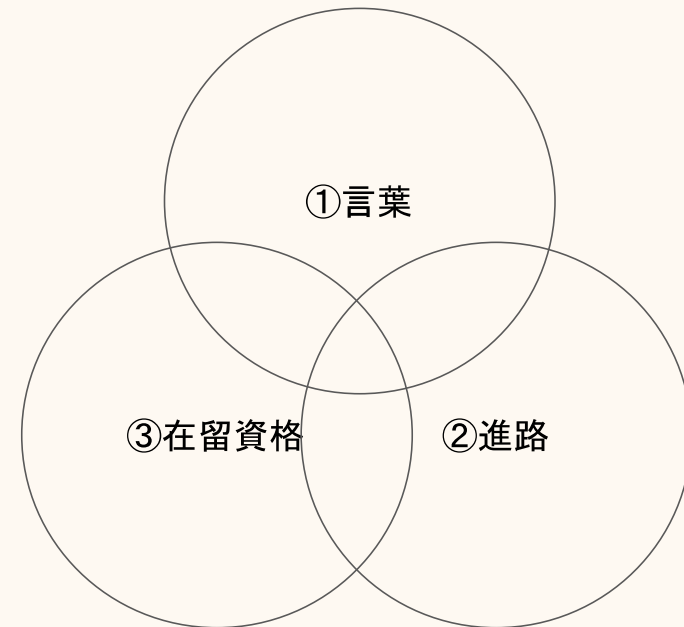
現状と課題

これまで出会ってきた高校生・若者たちのケース

①日本語の壁

②進路の壁(進学・就労)

③在留資格の壁



これに加えて、情報格差・経済格差・社会関係資本の格差などがある

はじめに

本日の流れ

①自己紹介・活動紹介

②現状と課題(外国ルーツの高校生・若者について)

③提案(高校と連携した青少年育成に向けた視点・設計)

「ユニバーサル・デザインとしての青少年教育」の視点・設計

「誰もが取り残されない教育」を具体化するにあたって・・・

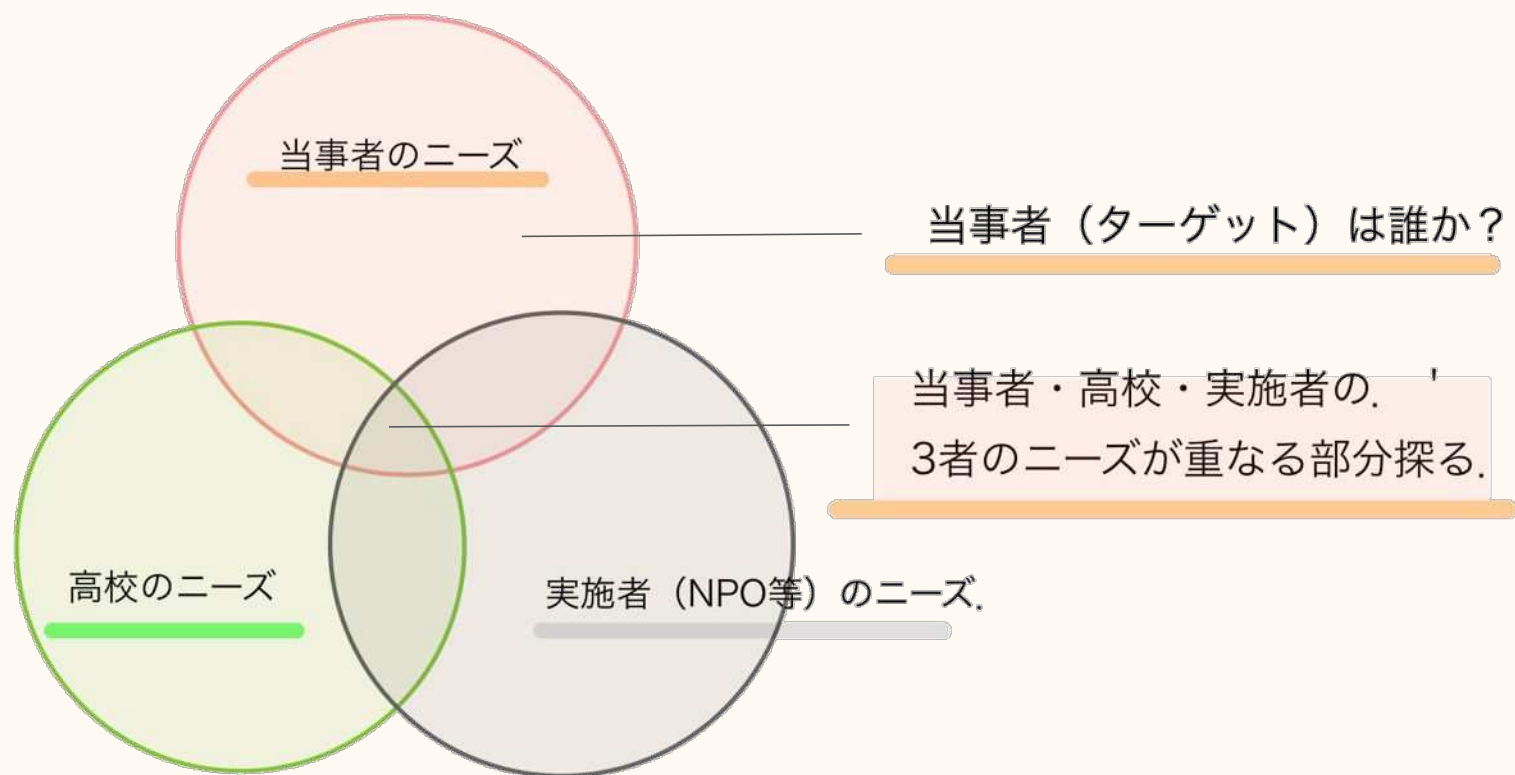
①前提要件

②ターゲット(利用者・参加者)

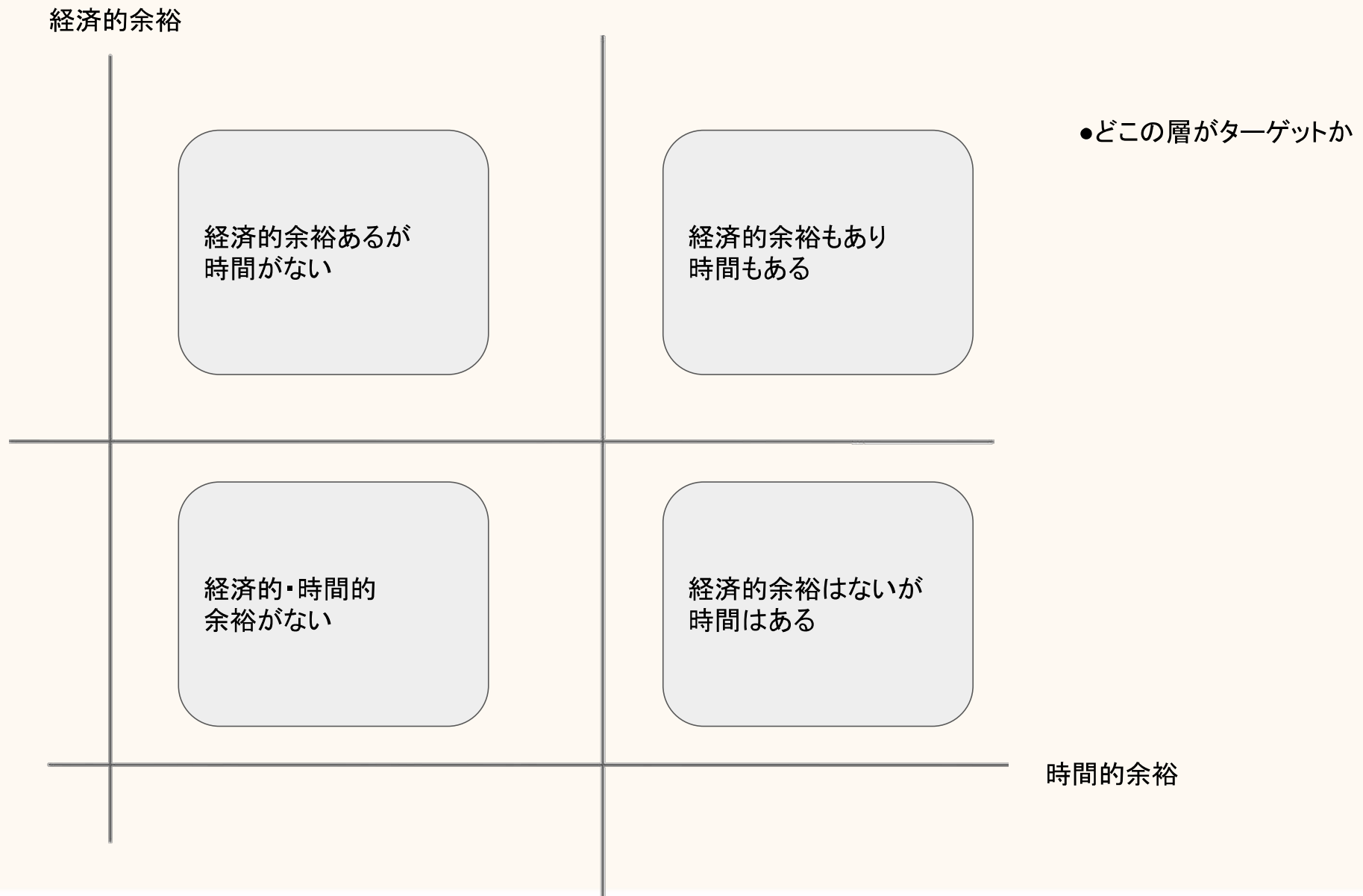
③提供する価値

④場の設計・仕掛け

①前提要件の考え方



②当事者(参加者)→ターゲット設定



③提供する価値

「機会の提供」

①「場」の提供 : 物理的なスペースとしての場

②「学び」の提供 : 日本語・母語、文化など

③「つながり」の提供: 生活や進路相談など

①「場」の提供 : 物理的なスペースとしての場



①「場」の提供 : 物理的なスペースとしての場

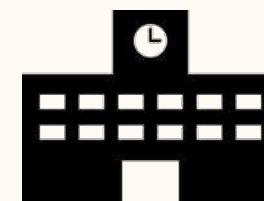
Study スペース(高校生向けCoworkingスペースのイメージ)

(課題・ニーズ)

- ・多くの高校生が自分の部屋がなく、wifiやPCなどがない場合もある。
- ・勉強や一人の時間を過ごす場が家になく、勉強が進まない。

(対応策)

- ・土日でも学べる場として、学校の間を提供し、家庭環境の格差を埋める。



②「学び」の提供 : 日本語・母語、文化など



②「学び」の提供 : 日本語・母語、文化など

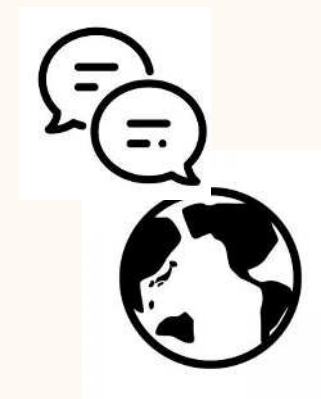
日本語・母語・母文化クラスの開講

(課題・ニーズ)

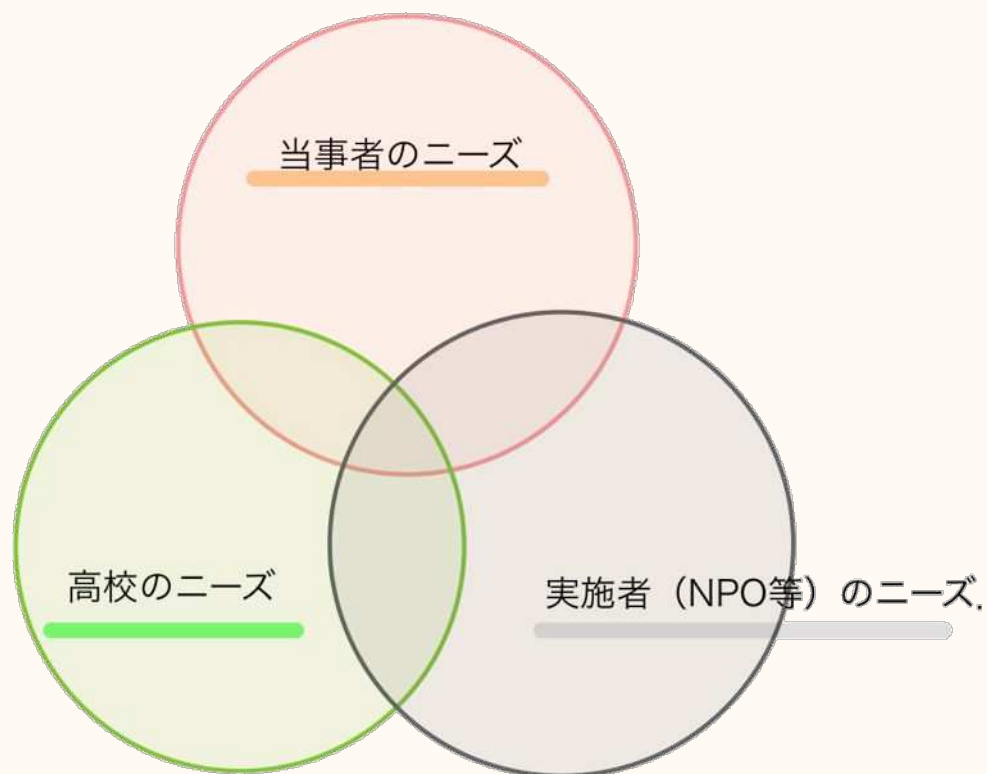
- ・高校生や中退した若者など、若者世代が日本語を学ぶ場が少ない
- ・日本生まれや幼少期に来日した外国ルーツの子どもが母語や母文化を学ぶ場が少ない。

(対応策)

- ・日本語や母語・母文化を学べるプログラムを提供し、言葉や文化の力を身につける。



③「つながり」の提供：生活や進路相談など



③「つながり」の提供：生活や進路相談など

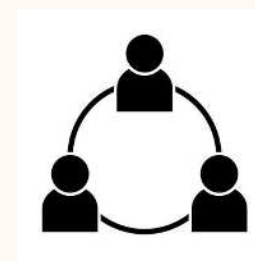
法律相談や進路ガイダンスの実施

(課題・ニーズ)

- ・在留資格に関して、学校では対応が出来ない場合がある。
- ・進路について、具体的な相談ができる身近な先輩や大人の不在。

(対応策)

- ・専門家に寄る相談会や進路ガイダンスなどを実施し、高校生に加えて中退者や若者も参加できることで、のこぼれがちな層に、支援を届ける。



→社会とのつながりを作り、セーフティネットとしての機能を持たせる

機会の提供 → 役割と居場所の設計



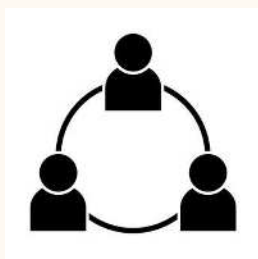
機会の提供 → 役割と居場所の設計

①「Youth Council」: 高校生・若者が企画運営に参加

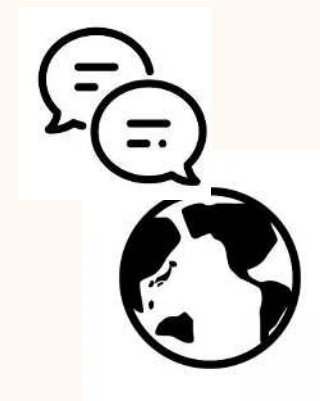
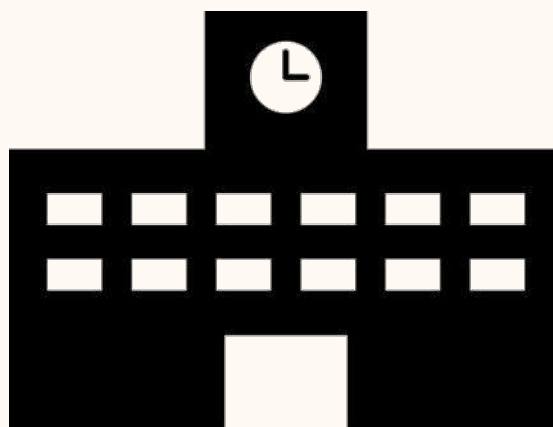
②「先生」の役割 : 外国人の若者や保護者が先生役を

→ 活躍の場をつくる事を通じて、「自分ごと」化され、
エンパワメントの機会の提供につなげる。

社会とのつながりを作り、セーフティネットとしての機能を持たせる



ちょっとした相談から、
専門的な相談ができる場



学習やスキルなどの学びの場

学校・・・ハード面でのインフラ・セーフティネット(防災)の機能



ソフト面でのインフラ・セーフティネット(福祉)の開発